

## 伊那谷財団

C-02-18

長野県内において、環境保全活動のほか地域に伝わる生活の知恵や技の伝承、省エネルギー・リサイクル技術等の研究に関わる活動を行っている個人または団体に助成しています。

### 長尾孝之さん：木曾谷の自然観察を続けて

ふるさと木曾谷の自然観察を長年続け、特に野草やクマタカの調査をライフワークにしています。「なんで？」と不思議に思ったことは調べずにいられない性分で、山の奥の奥まで自分の足を運び、自分の眼で確かめてきます。伊那谷財団では、氏のハコネサンショウウオに関する調査、ヒメギフチョウの生息地の手入れ、御嶽の水質調査などに対し、過去5回助成しました。

#### ● 木曾だけに見られる？ハコネサンショウウオの生態

長尾さんが20数年前、木曾川の最上流・味噌川の支流へ野草の調査に行ったとき、ハコネサンショウウオを見つけました。木曾谷では幼体ばかり観察されるのに、ここのそれは立派な成体です。しかも、夜行性だと聞いていたハコネサンショウウオがまるで日向ぼっこをするかのように昼日中の日差しを浴びています。

研究者に聞いたり、資料を調べたりしてみても、こうした生態が観察されたことはありません。果たしてここのハコネサンショウウオだけが特別なのか。関心を持った長尾さんは、それからずっと観察を続けています。その謎を解き明かすとともに、8月末頃と思われる繁殖、産卵を観察することが今の課題です。

#### ● クマタカや野草の調査

20代半ばで日本野鳥の会に入ったころから、長尾さんはクマタカの調査を続けてきました。かつて寒中の木曾谷でトビより多く見られたこともあるクマタカの観察頻度が最近減少したことから、テリトリーの中でも見付けづらい場所の巣を利用していると考え、その姿を追っています。

野草の方も付き合いは長く、子どもの頃家の近くの畑でオキナグサの可憐さに魅せられて以来、木曾谷を中心に県内各地を歩いて野草を観察、撮影しています。ときに野草が盗掘されているのに心を痛めながらも、今年もきれいに咲いた花たちに出会うと、心に灯が灯る想いがするそうで、「野草も動物も、自分が汗をかいてそこまで行って見た方が、きれいに見えるね」と話します。

#### ● ふるさとの里山の移り変わり

他所から見ると自然が豊かに思う木曾も、少しずつ環境が変わっています。たとえば野鳥の数も以前と比べて少なくなりました。鳥居峠でよく聞いたコルリの声も最近では聞かれなくなりました。こうした夏鳥が少なくなると、その巣に託卵するホトトギスやジウイチなども数が減ります。「やっぱりつながりが出てくるんだね」と長尾さん。

また、一度途絶えたかみみえたカタクリの群生地では、その場所の林を手入れしたら地面に日が差すようになって、またカタクリが咲くようになったとか。同様に、よく整備されたきれいな森林から流れる沢はきれいなのだそうです。

「生まれ育ったところでも、分らんことが多すぎて」。身近な環境への好奇心は今も長尾さんに湧いてきます。そうした人の目が、ふるさとの自然に向けられていることを、私たちはとても貴いことだと思います。



長尾孝之さん



ハコネサンショウウオ



クマタカ



オキナグサ

● 設立趣意

人類にとってこの100年は、地球環境の臨界点に向かってひたすら突き進んできた時代でした。地球環境の限界がはるか遠くにあった頃、人類はそれを無限であることと同義として、拡大こそが豊かな暮らしへの道だと信じてきました。そして今、あふれるほどモノに満たされた生活の中で、人々は地球環境の限界を目のあたりにし、その危ういバランスに不安を抱きながら暮らしています。一見豊かな自然に囲まれた伊那谷の暮らしも、決して例外ではありません。大量生産、大量消費によって成り立ち、大量廃棄を行う社会経済システムに隷属し、化石燃料なくしては、その生活は成り立たなくなってしまいました。

そして、それと同時に伊那谷に伝わる自然とともに生きるための技もその多くが失われつつあります。

人類にとっての最大の課題は、有限の自然環境に対して、いかにして調和を見出していくかということです。限りある資源を大切にし、生態系を乱さない生活のしぐみを伝承し、その知恵を普及していかなければなりません。そのためにも、環境に負荷をかけない技術の研究に対して財源的基盤を提供することや、地域社会に対して自然とともに生きる循環型社会に対する啓蒙を行っていくことが重要となります。

よって、ここに我々は、自然環境保全技術の研究や地域に伝わる自然とともに生きるための技の伝承などに対しての助成や、環境保全、リサイクルに関する交流会および講演会の開催を通じて、自然環境保全と文化の伝承に寄与することを目的として1996年9月4日、財団法人伊那谷地域社会システム研究所を設立、2014年4月1日に一般財団法人 伊那谷財団と名称変更いたしました。

● 過去22回の助成代表例

(敬称略)

助成先	助成内容
木祖村自然同好会	木祖村の自然環境保護と保全活動
栗田 秀實	新方式小型高効率水力発電装置の研究
竹重 聡	伊那谷に自生する希少野生生物の研究
竹田 扇壽	伊那谷民俗芸能「竹田人形座」の継承
信州さきおりの会	裂織文化の継承と普及
大窪 久美子	長野県南部、特に伊那盆地における外来植物図鑑作成
リサイクルシステム研究会	天竜川水系水質調査と子供たちを中心とした環境教育
若狭 信次	自作太陽電池を活用したIoTの教材化

分野別助成額累計  
【第1回（1997年）～第22回（2018年）】

